

## ルカによる福音書19章 「エルサレム入城」

### 1A 既に来て、やがて来る御国 1-28

1B 失われた者を捜される主 1-10

2B 王の再来に向けた商売 11-28

### 2A 平和を知らなかったエルサレム 29-48

1B ろばの子に乗られる主 29-40

2B 揺り動かされる神殿 41-48

## 本文

ルカによる福音書 19 章を開いてください。私たちはついに、9 章から始まってきた、ガリラヤ地方からエルサレムへの旅が終わります。今、イエス様はエリコを通られています。前回の学び 18 章において、一行がいよいよエルサレムが近づいてきたので、イエス様が再び弟子たちに、ご自分の通られる道について説明をされました。「ルカ 18:31-33 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」それでも、弟子たちは悟ることができなかったとあります。

しかし、エリコに近づきました。エリコは、死海のすぐ北にあり、ヨルダン川沿いにある町です。ヨルダン渓谷がガリラヤ湖や死海沿い、ヨルダン川の周囲を南北に走っています。ガリラヤの人たちがエルサレムに行く時は、直線のサマリヤ山地を通るのではなく、ヨルダン川沿いを歩き、そしてエリコのところで西に向かいます。エリコからエルサレムまでは 24 キロ離れていますが、高低の差が千メートルもあります。歩くと八時間ぐらいかかるそうです。興味深いことに、エリコは約束の民イスラエルが、約束の地に入る時に初めに征服した町であり、またバプテスマのヨハネやイエス様ご自身が初めに活動していた、荒野の地域であります。エリコはオアシスになっており、緑が茂っていますが、その周辺はユダの荒野のです。したがって、主がご自分の働きを始める場所であり、意義深い出来事が二つエリコで起こっています。

一つは、盲人の乞食の信仰です。彼は道端で物乞いをしていましたが、イエス様が通りかかりました。彼は、「ダビデの子イエスさま。私をあわれんでください。」と叫びました。人々がたしなめましたが、彼はなおのこと叫びたてました。そして、イエス様が近づき、「何をしてほしいのか。」と尋ねると、「主よ。目が見えるようになることです。」と言いました。そしてその信仰のとおり主が癒されると、彼は神をあがめながら、イエス様に付いていきました。

イエス様がエルサレムへの旅において、「神の国はいつ来るのか」という問いをされましたが、主

は、「神の国はあなたの只中にあるのです。」と答えられました。主は確かに来られます。しかし、もう既に来られているのです。今、そこにおられる主を受け入れずして、どうして来るべき神の国を受け入れることができるのでしょうか？主とそのキリストとしての働きを受け入れてこそ、そこに霊的に神の国が拡がります。そして再び来られる主による御国を相続することができるのです。心の中にキリストを受け入れて救いが与えられ、それから後に来る神の国に入ることができます。盲人の乞食は、後に来る神の国で起こること、すなわち主が盲人の目を開かれるということ、イエスご自身をいま信じて受け入れたので、その場で御国の祝福の一部を受けたのです。

### 1A 既に来て、やがて来る御国 1-28

そして、エリコに一行が入ると、さらに神の救いを受け入れる人物が現われます。

### 1B 失われた者を捜される主 1-10

19:1 それからイエスは、エリコにはいて、町をお通りになった。19:2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。19:3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。19:4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。19:5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」19:6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

エリコの手前で物乞いでしたが、実に対照的な人物です。金持ちです。けれども、共通していることがあります。それは社会的に疎外されているということです。物乞いの盲人は、イエス様に近づこうとしたら、たしなめられました。そして、取税人はローマのためにユダヤ人から徴税する人であり、異邦人の国からの解放ではなく、むしろ虐げに加担している者として、ユダヤ人に忌み嫌われていました。実際に、人々から必要よりも多く取り上げていたので、私腹を肥やしていたので、ユダヤ教の中では罪人の分類に入れられていました。そして、この男は「取税人の頭」とありますから、本当に貪欲な者の代表的な存在だったのでしょう。

そこでこの両者が、その求道の熱心さにおいて同じものをもっていることに気づくべきでしょう。人々が盲人を黙らせようとして、「ダビデの子よ。私を憐れんでください。」と叫び立てました。ザアカイは、背が低いので群衆のために見るができないから、前方に走り出て、いちじくの桑の木に登ることさえしました。ここで「イエスを見るために」という言葉が、懸命に試みて、見出そうと探し求めるという意味合いの言葉が使われているそうです。彼は、イエス様に好奇心を持っていただけでなく、熱心に、懸命に探し求めていました。イエス様がかつて、付いてきている群衆に、「なぜ自ら進んで、何が正しいかを判断しないのですか。あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するように努めなさい。(12:57-58)」と言われました。自ら進んで、熱心にイエスを求めるのです。

ですから、福音は全ての人のためにあります。貧しい乞食のための福音であり、また金持ちのための福音でもあります。しかし、すべて信じる者に救いを与える神の力です。信じるという心、心の貧しさやへりくだりが必要です。

しかし、主はこのことを前もって予め、知っておられました。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」とされています。ザアカイが熱心にご自身を求めるとイエス様は既に知っておられて、彼に救いをもたらすことを定めておられました。ザアカイが主を求めると前に、主がザアカイを捜し出し、見つけておられました。このような出来事は、サマリヤの女の時にも見出せるものでした。ヨハネ 4 章に、「主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった。(4:3-4)」とあります。サマリヤを通らなければならないのは、そこに生ける水に渴いていた女がいて、彼女を救うためでした。救いは、神の主権によってもたらされるものなのです。

19:7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。  
19:8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」19:9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

罪人の客となった、というつぶやきは、これまでに何度となくイエス様は非難を受け、その度にイエス様はお答えになられていました。主は、ある時は、「5:31-32 医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」とされました。またある時には、百匹のうち一匹が失われてそれを羊飼いが捜す警え、それから放蕩息子の警えを話されました。しかし、主は救いを受ける者たちには、親しく交わってくださいます。食事をすることによって、主がご自分のものをその人と分け合ってくださいるのです。

そして大事な部分が出てきます。まずザアカイは、「主よ。」と呼んでいます。彼は、イエスを主として受け入れ、信じていました。それで彼は、自分の持っている財産を貧しい人に施すと言っているのです。それから、「私がだまし取った物は、四倍にして返します。」と話しています。これはモーセの律法に基づく行為です(例:出エジプト 22 章 1 節)。ですから、彼は悔い改めの実を結ばせていると言えます。これらの行いをしたから、救いを受けたのではありません。熱心にイエス様を求めて、この方を受け入れたから、自分のこれまでの行いを改めることができたのです。

覚えていますが、前の学び 18 章で、金持ちの役人が永遠の命を受けるにはどうすればよいか、尋ねました。イエス様は、「貧しい人々に、あなたの持ち物を全部売り払って、それで分け与えなさい。」とされました。しかし、彼は非常に悲しんでその場を離れたのです。そしてイエス様は、「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことか。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだ

が針の穴を通る方がもっとやさしい。」と言われました。しかし、人にはできないことでも神にはできるのです。したがって、ザアカイは自分では決してできない貧しい人への施しや、騙し取った者への償いを、自分の意志の力で行ったのではなく、もっぱら主の訪れに感動して、その救いによって与えられた新しい心で、これらのことを行なうことができました。救いは良い行いによって得られるものではないですが、良い行いのために救いが与えられます。

イエス様は、「きょう、救いがこの家に来ました。」と言われています。「きょう」というのが大事ですね、主はいつも人を救うことを願われていますが、その御業を行なわれる特別な時、主の定められた時があります。そして、イエス様は、ザアカイのことを「この人もアブラハムの子なのですから。」と言われました。神の祝福を受けるために選ばれた民だということです。ちなみに、ザアカイという言葉は、「清い」「無垢な」という言葉から来ています。全くそうではなかったのに、主が予めそうして下さるよう選んでおられたかのような名前です。そしてかつて、18年もの間、病の霊につかれていて背を伸ばすことのできない女性についても、「この女はアブラハムの娘なのです。」と言われました(13:16)。ここに、主の恵み深さと差別の無さを思います。アブラハムの子孫という神の恵みの選びを、それを受けるに値しないように人々から見られる人にも、惜しみなく注がれます。私たちがいつも、誰に対してもキリストが死なれたという理由だけで、主がその人を救いたいという情熱と愛を持っているようにしたいです。

## 2B 王の再来に向けた商売 11-28

19:11 人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現われるように思っていたからである。

イエスに付いてきた人々は、物乞いの盲人やザアカイのように神の救いを受け入れていないのに、そのまま付いて来ている人々が大勢います。そのような人々は、イエス様がエルサレムに入られたらすぐに神の国が現われると思っていました。そこでイエス様は、ご自分の計画について警えを用いて語られます。

イエスの弟子たちは神の御国について二つの段階があることを知らなければいけませんでした。パリサイ人が「いつ神の国が来るのか」と質問して、「只中にある」と答えられた後に弟子たちにはこう話されました。「いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。(17:24-25)」主が栄光の輝きをもって、戻ってこられます。けれどもまず、多くの苦しみを受けてこの時代に捨てられます。私たちは、主の死を告げ知らせる聖餐にあずかっていますが、その死と復活によって神の国にある救いが人々に及びます。ですから、すでに神の国は来たのです。けれども、まだ来ていないのです。再び戻ってこられる御国を私たちは待ち望んでいるのです。「既に」御国は来たのですが、「未だ」来ていないという狭間の中で私たちキリスト者は生かされています。

19:12 それで、イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。19:13 彼は自分の十人のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、これで商売しなさい。』19:14 しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたのです、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。』と言った。

ここの譬えは、ユダヤ人にとって身の覚えのある話です。ヘロデ大王が死んで、息子三人がその支配領域を分割してその後を継ぎました。その一人、ヘロデ・アルケラオスはローマに行き、ヘロデ同様の王の称号を得たいと申し出ましたが、許されませんでした。兄弟アンティパスや多くのユダヤ人がローマでその動きに反対したからです。

けれどもここは、イエス様をご自身をその身分の高い人に当てはめておられます。そして、これら僕たちはご自分の弟子たちのことです。そして、王になってもらいたくないと言っている国民はユダヤ人のことです。ユダヤ人は主が復活され昇天された後も、その多くはイエスを自分たちのメシヤとして拒みます。そして、一ミナは百日分の労賃に相当する額ですが、十人の僕に一ミナずつ預けて、それで商売しなさいと言われます。ですから、イエス様は今すぐに神の国が成り立つのではなくて、ご自身はまずこれらの財産を弟子たちに託して、それを弟子たちが運用してそれを増やし、そしてその利益をご自身が王として戻ってきた時に受け取られることを意図しておられます。

主の救いを受け入れた盲人やザアカイがありますが、彼らは神の恵みによる賜物を受けたと言えます。主は、十字架につけられ甦られます。それから天に昇られますが、その後、御父に願って人々に与えられるのは聖霊の賜物です。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。(ヨハネ 14:16-17)」そして、主はその聖霊によって私たちが、主に仕える能力を与えられました。「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」(エペソ 4:7-8)」

ですから、主はご自身が戻ってくるまでの間、聖霊の賜物によってご自身の働きを継続されています。私たちが、御霊の力によってそれぞれが主に仕えるその忠実さに従って、主はご自身が戻ってこられる時に報いを与えられようとしておられるのです。それが来る神の御国において相続する報酬ということになります。

19:15 さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼ら呼び出すように言いつけた。19:16 さて、最初の者が現われて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』19:17 主人は彼に言った。『よくやった。

良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』  
19:18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』19:19  
主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』

主は、他に種まきの譬えで、良い土地に落ちた種は三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせると言われましたが、私たちは主から与えられた義と恵みの賜物によって、それを主が増やして下さるという御業を見ることが出来ます。そして、それを主がまさに望んでおられます。私たちから多くの実を見ることを主は望んでおられます。そして、その忠実さにしたがって、私たちは報いを受けるのです。「十の町を支配しなさい」とこの人は譬えの中で話していますが、御国において私たちは、キリストと共に御国を治める者になります。

19:20 もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。私はふろしきに包んでしまっておきました。19:21 あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしくございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』19:22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。19:23 だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』

マタイによる福音書 25 章では五タラント、二タラント、一タラントの譬えがありますが、ここではすべての人が一ミナです。そして三番目の人が、マタイの一タラントと同じような反応をしています。この僕の問題は何でしょうか？ 第一に、「不信」です。キリストの弟子であることを装いながら、それでもイエスを本当には信じていないという人々のことです。第二に、「だから、イエスに関わらない」ということです。今、イエス様に付いて来ている大勢の弟子たちの中に、そういう人たちがいたのでしょう。そして、今、私たちのキリスト教会にもそのような人々がいるということです。主に従っているようで、肝心のところで信頼していない、実は全く従っていなかったという人々です。マタイ 22 章には、王子の祝宴があります。招かれた人々の中に、礼服を着ていない人がいました。王が尋ねても答えないので、彼は外の暗闇に追い出されました。この人も基本的に、同じ態度です。盲人やザアカイのように、活発にイエス様に関わらないのです。それで実を結ぶことのない、あるいは商売を一切してこなかった人があります。

ここで主人が、「私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。」と言っていることに注目してください。罪というものの中で赦されない唯一の罪があります。それは「信じない」罪です。主が与えられた救いの賜物を受け入れない罪です。そして、その罪に対する裁きは、自分が神を裁いたとおりに受けるということです。神の憐れみを信じない人は、憐れみのない裁きを受けます。自分の不信の罪の通りに、その不信の蒔いた種を刈り取ります。

19:24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持って

いる人にやりなさい。』19:25 すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています。』と言った。19:26 彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている者までも取り上げられるのです。

ここを読むと、主は不公平な方のように思われるかもしれません。誤読すれば、まるで資本主義によって富が不平等に分配されていき、富んでいる者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるというように思えるかもしれません。けれども、ここでは神の恵みの原則についてイエス様は話しています。つまり、神の恵みの賜物は、「持っている者」すなわち、イエス様ご自身を受け入れている者、イエスご自身こそが命であり、財産であります。この方を持っているならば、永遠の命を持っており、そこには無尽蔵の恵みが用意されているのです。

その一方で、持っていない者とは、イエス様の近くにいるように振る舞いながら、実は核心部分でイエス様を受け入れておらず、罪を悔い改めていない人のことです。したがって、いくら自分がイエス様から受けていると言われている財産も、それを取り上げられるということです。イエス様の近くにいるようで、実は受け入れていないという人々への警告の言葉であります。そして、主はご自分の恵みを無駄にすることはなさいません。十トンの恵みを用意されているとすれば、一トンを無駄にしたくないのです、それで他の者たちに分け与えられるのです。恵みはますます豊かにされていくものであり、既に持っている者に分けてくださいます。

主は、このように働かれます。イエス様と豊かな関係を持っている人はますます祝福されます。けれども、それとなく付き合っていこうとする人は、持っていると思っていたものまでがどんどん、取られていきます。これは不平等のように見えますが、いいえ、平等にイエス様を自分の主として生きていこう、平等な機会が与えられているのです。ですから、妬んではいけません。横や周りを見てはいけないのです。自分自身が主に対してどう生きているのかという、縦の関係を見ます。

19:27 ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』19:28 これらのことを話して後、イエスは、さらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。

これは、あからさまにイエスを拒む者たち、王として受け入れない者たちがどうなるかについて述べておられます。エルサレムがいつか破壊され、彼らが殺されることを予告しておられます。

## **2A 平和を知らなかったエルサレム 29-48**

そして主はついにエルサレムに入られます。

### **1B ろばの子に乗られる主 29-40**

19:29 オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、19:30 言われた。「向こうの村に行きなさい。そこにはいると、まだだれも乗った

ことのない、ろばの子がつかないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。19:31 もし、『なぜ、ほどくのか。』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』19:32 使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。19:33 彼らろばの子をほどいていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか。」と彼らに言った。19:34 弟子たちは、「主がお入用なのです。」と言った。

イエス様がエルサレムに入られる時に、ろばの子を用意されています。それは、ゼカリヤにある預言を成就させるためです。「ゼカリヤ 9:9 シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに來られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」主が、力をもって栄光の姿で現われるのではなく、正しく、救いを賜る方で、柔和でろばに乗られるとあります。これを成就させるためですが、弟子たちはこのことについてはイエス様が復活され、昇天されてから、ようやく悟ることができたと思徒ヨハネは記しています(12:16)。

救いについて、ザアカイについて示されたようにイエス様がすでにそれを掌握されていました。そしてこれから主は、苦しみを受けられます。けれども、これらもまたすべてイエス様の掌握の中で起こっていきます。彼らは反対し、殺すことを意図しますが、その反対でさえも主は父の御心の中で積極的に支配していかれます。全ての状況は神の御心の通りであり、主のなすがままであります。このことが私たちを安心させます。主は私たちの罪をご自分の意志で受けられました。

19:35 そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。19:36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。19:37 イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、19:38 こう言った。「祝福あれ。主の御名によって來られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。」

イエス様は、王としての歓迎を受けられました。他の福音書では、「主の御名によって來られる方に」と書いてありますが、ここでは「主の御名によって來られる王に」となっています。王としてのキリストを意識して、弟子たちは叫んでいました。(そしてその周りで群衆も叫んでいました。)弟子たちが上着をろばの子の上に置いたり、人々が道行ところに敷いたのもそのためです。ここで弟子たちは、本気でイエス様がイスラエルを贖ってくださると思っていました。主が復活されて、エマオの村に行く途中の弟子たちの言葉に、その思いが表れています。「24:19-21 この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。」

そして、詩編 118 篇にあるこの言葉の他に、彼らは「天には平和。栄光は、いと高き所に。」と言っています。主が天から來られる方であり、そこには平和があり栄光があるということです。ダニエ

ルカ 7 章には、父なる神が御座におられて、そこから人の子が雲に乗ってこられて、それで異邦人の国々を粉々にされることが預言されています。その天にある平和と栄光です。その栄光をもって主が誕生された時、御使いが賛美しましたね。「2:14 いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」福音の結実は、平和であります。ルカによる福音書には、福音における平和という側面を強調しています。しかし、それを受け入れないのでエルサレムは災いを受けるということを、これからイエス様は話します。

19:39 するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかってください。」と言った。19:40 イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

パリサイ人たちは、これが明らかにメシヤの到来において行なうことであることを聖書から知っていました。詩篇 118 篇にそう書いてあります。イエス様はこれまで、このようなことをさせないよう気をつけて動いておられたが、この時は神の定められた日でありました。ダニエル書 9 章における、七週また六十二週の後に、メシヤが断たれるという預言の通りの日でありました。だから歓声を受けられました。

そして大事なのは、「もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」とあることです。人が神の働きを反対しても、石のような非生物も、神の創造した物ですからそれらを通して神はご自分の願われることを行われるということです。石は、イスラエルに行けばどこにでも転がっています。特にオリブ山には、ユダヤ人がメシヤがオリブ山に到来するというゼカリヤの預言を信じ、かつダニエル書 12 章にあるメシヤ到来によるよみがえりを信じていたので、そこに墓地があります。墓は石で造られていますから、それが叫ぶでしょう！と言ってらっしゃるのです。

バプテスマのヨハネが、「こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができるのです。(3:8)」と言いましたが、私たちは主のなされることを、あたかも私たちがいなければできないという気持ちになります。ここで改めて、主はどんなことでもおできになり、私たちはその恵みにあずかっているだけなのだということを知る必要がありますね。主の働きは私たちのものではありません。

## 2B 揺り動かされる神殿 41-48

19:41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、19:44 そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

オリブ山を降りていくと、今、涙の形をした屋根を持つ教会が建っています。そこから目の前に、岩のドームを見ることができますが、そこには神殿がありました。その教会はこのイエス様の嘆きの涙を記念するための教会です。イエス様は平和の福音を持っておられました。けれども、エルサレムはこの平和を拒みました。イエスを王とすることを拒みます。そのために、敵がやってきます。ここに書かれてある悲惨は、紀元後 70 年にローマによる神殿破壊で実現します。ヨセフスのユダヤ戦記には、エルサレムにおける悲惨な状況を克明に記されています。また、神殿が初めて破壊された時、つまりバビロンによって破壊された時にも、エレミヤが同じような嘆きによって嘆きました。「哀歌」にそれが記されています。嘆きの壁に行く時は、哀歌を読むとよいかもしれません。

ここで、イエス様が「おまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」と言われます。訪れの時とは、先ほどザアカイに「きょう、救いがこの家に来ました。」と言われたのと同じです。主はいつでも平和をもたらそうとしておられますが、ある定められた時にその平和を実行に移す特別な時を持っておられるということです。その機会をエルサレムが逸するために、彼らは災いをこのような形で受けるといふことでもあります。私たちにも、このような救いの時があります。ザアカイのように、その機会をなんとかして掴もうとする求道の心が一人一人に必要です。それを失うと、救いはいつも用意されているのですが、また掴み取ることが非常に難しくなります。

19:45 宮にはいられたイエスは、商売人たちが追い出し始め、19:46 こう言われた。「『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にした。」19:47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長、律法学者、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらっていたが、19:48 どうしてよいかわからなかった。民衆がみな、熱心にイエスの話に耳を傾けていたからである。

宮清めでありましたが、ここで大事なことは、イエス様は平和の福音を携えておられたのに、平和とは裏腹の、神殿の秩序を乱す行動に取られていることです。そして、ユダヤ人指導者にとって神殿の秩序が乱されることこそが最も恐れていることであり、それはローマが介入して自分たちの国民と土地を奪うことにつながりかねないし、そして自分たちの地位や財産が奪われることにつながるからです。

しかし、どちらが本当に平和なのでしょう？主ご自身は、「あなたがたはここを強盗の巣にしている。」と言われました。祈りの家が強盗の巣になっているのです。それを壊すことは、神の平和の始まりなのです。私たちは罪ゆえにむしろ安定しているもの、騒ぎがないものがあります。それはしかし、人をついには滅ぼすのです。騒ぎが起こっていることは、つまりはまことの救いと平和が与えられるための霊的な剣であります。イエス様は、私たちの平穩をそう言った意味で壊そうとされます。罪を悔い改め、真実な癒しと平和が与えられるためです。